

---

# **禁断の果実は一日三個まで**

あかさたな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

禁断の果実は一日二個まで

### 【Zコード】

N4104BA

### 【作者名】

あかさたな

### 【あらすじ】

使われていない第一図書室の司書室。「彼女」はそこでいつも香氣に茶を啜つているのだという噂。「彼女」に報酬さえ払えば、悩みの相談や解決、復讐…なんでもしてくれるのだという。貴方は「彼女」に何を願いますか？

## 裏・学園相談係宝船リリカ

天真爛漫、軽挙妄動。

そんな姿勢が彼の人気ポイントであり、「教師」としての責任感の低さを表していた。

田向七尾。

身長176センチ。体重61キロ。茶髪に黒縁眼鏡でまさしく「イマドキ」なスタイルをした、ごくごく普通の新米の高校教師。生徒からの信頼も厚く、女子男子性別問わず、彼の下へ相談しに来る子が多い。（主に恋愛に関して）

しかしそんな彼を鬱陶しく思い、煩わしいと野暮つた視線を送る輩も少なくはない。

まさしく、今日の前で愚痴を零す教師もそうだった。

「私、この学校の相談係なんですよ？進路、家庭環境、学校生活、クラブ活動、恋愛…あらゆる生徒の問題に向き合うのは、この学校では私の仕事なんです…」

ハンカチで目元を拭いながらボソボソと少し聞き取りにくい声色で話を続ける教師。

下マスカラをハンカチで拭ってしまったため、目の下がクマみたいになっていて面白い…といつのは今は言わないであげよう。

「だのに…まだ新任の田向先生に生徒人気…全部取られちゃって…！ひどいと思わない！？」

うとうと、ととつあえず首を縦に振る。首を動かしながら茶を啜つ

た。

それにつられてか、女教師も少し茶を啜つた。

「…ひ、熱…！」ねえ、この現状…宝船さんの力でどうにか出来ないかしら…？」

火傷した舌を少しほみ出させ、視線をこちらに向ける女教師。女教師からはこちらは逆光の様で、少し眩しそうに目を細めた。

「…それは、お願ひ、ってことで良いのかな？」

腰まで伸びた黒髪が、少女の体の動きと共に波の様に揺めいた。均等に配置された顔のパーツの全体が少し、上に持ちあがる。女教師はそれが「少女が笑ったのだ」という風に思考が動くまでに時間が掛かつたことに気が付いた。

まるで自分を、獲物を見つけたハイエナの様に見つめる少女に、日向七尾への訝しさなど何処かへ消え去つて仕舞つたようにも感じた。…が、ここまで来て怖氣づくことなど出来ない。

「…そう、そうよ…。どうにかして、これ以上日向七尾人気が上がるのを防いで欲しいの」

少女が何か言おうとした瞬間、女教師は「報酬は払つわ！」と即答した。

その答えがまさしく今言おうとしていた言葉だつたらしく、少女は先ほどとは違つた笑顔を見せた。

「行動を移す前に、まず500円頂こう。これは私が貴方の為に行

動を起こす為の報酬。成功報酬は成功したら頂くのでそれも覚えておいて？」

少女は手をヒラヒラを靡かせ、女教師へ催促した。

女教師は無言で500円を差し出し、早々と部屋を出ようとした。だが、扉の前で一度立ち止まり、再びこちらへ顔を向けた。

「……めんなさいね……こんな話…貴方にしか、出来なくて…。でも、「裏・学校相談係宝船リリカ」が実在してただなんて、正直少しひっくりしたわ……」

そうポツリと呟くと、女教師は方向転換し、ドアの向こうへと行ってしまった。

特に何も思わず、「リリカ」は少し冷めてしまった茶を一気に口に流し込み、少し鎧びた500円玉を見下す様に見つめた。

## 新米教師と禁断の果実

その次の日。

リリカは久しぶりに体育の授業に出る事に決めた。理由は勿論、日向七尾が体育の教師だからである。

机の上にジャージの入った袋と、体育館シユーズの入った紙袋を置くと、周りがザワザワと騒ぎ始めた。

「宝船さん、今日体育出るの？」（小声）

「ううそ…あの宝船リリカが…？」（小声）

聞こえてる…そう睨めつけながら言おうかとも思つたが、あんまりクラスで変なことを言つてイジメられたら嫌なので、黙つておこう。そのまま袋一つを持ち女子更衣室へと足を向けた。

「」で一つ説明をさせて頂きたい。

「裏・学校相談係宝船リリカ」という存在はこの学校ではただの都市伝説となつており、勿論リリカは何度もこのことについて問い合わせられたが、彼女は

「都市伝説上の登場人物と名前が被つているだけ。私、人の相談とか聞くの嫌いだし。宝船リリカなんて名前ありふれてるし」

と、見事に一蹴した。

他の生徒たちは正直「そんな名前ありふれているワケない」と誰もが思つたが、彼女の言う「相談とか聞くの大嫌いだし」というワ

ドはそれ程外れている様でも無さうなので、これ以上は追及しなかつた。あと、多分リリカの性格がめんどくさそうだったからもう絡むのはやめようと誰もが思つた瞬間だと思つ。

そういうしている間に、何とかリリカはジャージに着替えることが出来た。

途中で髪の毛がジャージのチャックに引っ掛けたり、ズボンを表裏逆に履いていたり、色々とトラブルがあつたものの、体育館シュー  
ーズを履き、少し急ぎ足で体育館へと向かつた。

すでにほかの生徒は整列しており、とりあえず女子の列の最後尾につく。

…逆背の順らしく、身長151センチのリリカの場所はどうやら最後尾の一人だけはみ出た場所で正解だつたらしい。

すると奥から、「お～整列してんな～」と、少し間抜けな、でも低く心地の良い声が聞こえてくる。

(やつつか…)

その間抜けな声の主が「前から順番に座つてけ～」というと、前の身長の高い組から順にウェーブの様に頭の位置が低くなつていつた。あまり目立ちたくなかったリリカは（だって一人だけはみ出てるし）  
、前の列と全く同じタイミングでしゃがみ込むことに成功。

普段体育なんかに出ないリリカにとっては、こんなのも深く溜息を付いてしまう程に疲れる行為だった。

## 新米教師と禁断の果実2

少し首を伸ばし、前方で何か書類のような物に視線を落としながら意味不明な話をペラペラと喋る、ジャージ姿のただのイケメンを見つめる。あいつが日向七尾で間違いないだろ？

少しパー、マのかかった茶髪は、しばらく美容院に行っていないのか、少しプリン気味で地毛の黒髪が少しづつ染めた部分を侵食しているのが見える。（リリカの視力は2・0）

眼鏡をかけていると聞いたが、今はかけていない。恐らく授業中外しているのだろう。

「…じゃ、出席どもー」

軽く五分ほど世間話を広げてから、手にしている書類を二ページほどめくってから生徒の名前を一人ひとり呼び始めた。

リリカの心中は青だった。真っ青だった。

まさか、名前を呼ばれるなんて思つてもいなかつたからだ。

名前を呼ばれた他の生徒は律儀に「はい」と返事をしており、その度に日向は「おー」と返事をしながら出席簿にをつけていた。

こんなの… 羞恥プレイじゃないか…！

そういうしている内に、いつの間にか出席取りは「は行」にまで突入していた。

「羽鳥ー… おー。古川ー… おー、怪我治つたかー？ 間富ー」

あ、あれ…

ほほせん、が飛ばされた。

少し嬉しいような、寂しいような微妙な感情に捉われたが、まあ良いかと再び日向の観察を続けようとした。

といひが、

「せんせーー宝船さんを飛ばしますー」

その声は自分の斜め前で足をクロスにして体育座りしている黒髪の少しほつちやりした男から放たれた。

山口、と途中まで言いかけた先生の声が宙に浮かび、ほつちやり男子出席簿の順で日向の視線が動いた。

ぽつちやつ男子の方を向くと、彼はこぢらを見て「ああ、気にしないでいいよ」と手をフリフリさせて少し頬を赤らめて笑っていた。

…違ひ…！

若干涙目になりながら、再び日向の方へ視線を向けた。

日向はバツチリこぢらを見つめており、一人の視線はぶつかる。

「…宝船…リ…リカ…か。お前、やっと体育出てきてくれたんだな

…」

他の生徒も、まるで不良が初めて自ら机の上に勉強道具を開いて授業を待っていた時の様に暖かい日で女子列の最後尾を眺めている。

「…ようし…お前だけ花丸にしてやるからな…」

日向は涙混じりの声で言い、ズボンのポケットから赤いボールペンを取り出した。

リリカの頬はにじんだボールペンの様に真っ赤に染まって行つた。

今にも泣きそうだった。

今日の体育はバレーボールらしい。

軽く準備運動と、体育館内を自口ペースで3周ほど走らされた後、体育倉庫からボールを運びだし、全員でネットの設置を始めた。リリカのみ、体力不足で3周走つただけで疲れ果ててしまい、他の生徒がバレーの用具を持ち運ぶのを眺めていた。

それに気づいた日向が、リリカに歩み寄る。

逃げようとも思ったが、足がガクガクで立ち上がることが困難だと思い、諦める。

「なんで急に体育の授業に出てみよっと思つてくれたんだ?」

汗で張り付いた前髪を分け、見上げると、二口ニコと笑うイケメン。ホントにこいつ、ただのイケメンだなー…と思いつながらも、口を開く。

「まあ、暇だったので…」

「ふうーん？でもお前、体力無さすぎじゃないか？何ならお前専用の授業開いてやるつか？」

膝を曲げ、ニヘニヘと笑いながらリリカの頬を引っ張る日向。

「やめへくらはー」

未だに息が上がっているリリカはそんなつまらない答えしか出来なかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4104ba/>

禁断の果実は一日三個まで

2012年1月10日23時48分発行